

平成 2 8 年 度

行 政 政 策 学 類

編 入 学 ・ 学 士 入 学 試 験

小 論 文

時 間 9 0 分

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子はこの表紙を除いて 5 枚、解答用紙は 1 枚です。
印刷不鮮明の箇所などがあれば、監督者に申し出て下さい。
3. 解答用紙の指定欄には、必ず受験番号を記入して下さい。
4. 解答は、別紙の解答用紙の解答欄に横書きで記入して下さい。
5. 解答用紙は持ち帰らないで下さい。なお、問題冊子と下書き用紙は持ち帰って
構いません。

【問題】

資料は、本田由紀『もじれる社会——戦後日本型循環モデルを超えて』（筑摩書房、2014年）からの一部である。これを読んで、以下の設問に答えなさい。

※ 原文中の小見出しは省略した。

問1 本田氏のいう「ポスト近代型能力」およびその背景について、300字以内で要約しなさい。

問2 「ポスト近代型能力」を子どもが身につけるうえで、社会階層がどのように関係してくるのか。本田氏の見解を300字以内で要約しなさい。

問3 傍線部のような本田氏の見解に対して、あなたの意見を600字以内で述べなさい。

——子どもや若者に対する「ポスト近代型能力」への要求が高まっていると指摘されています。「ポスト近代型能力」とは何ですか？

本田 最近、「人間力」とか「社会人基礎力」「就職基礎力」など、いろんな言葉を各省庁や経営者団体、審議会などが使い始めています。それらを総合的にとらえる概念として「ポスト近代型能力」という言葉を考えてみました。

これまでの近代型能力主義で求められていたのは、どれくらい多くの知識を覚えられるか、どのくらい早く計算ができるか、など量や速さで測れるような能力でした。これに対して、いま求められるようになってきているのは、「頭のよさ」とは別の、もっと融通無碍で曖昧な能力です。「問題解決力」や「創造力」「コミュニケーション能力」など、いろんな言葉で言われていますが、これらに共通しているのは、第一に、感情や人格の深いところまで含む「人そのもの」という性格をもっていること。第二に、正確に測定できないということ。そもそも「個性」や「多様性」は測定・比較のしようがない。

こうした能力は、言説のレベルにとどまらず、現実にも影響を及ぼし始めています。たとえば昔は勉強のできる子どもがクラスでも人気のある子でしたが、今は勉強ができることと、人に好かれてリーダーシップをとれることは、必ずしも重ならない。子どもたちの間では、基礎学力よりも、むしろ対人能力が基準としてより重視されるようになっており、その格差が開いているといえます。

また、若者たちを対象にした調査では、正社員になれるかということについては、従来通り、学歴や学力などの要素が重要ですが、収入や、あるいは自立意識や社会参加、満足感などの主観的な地位については、コミュニケーション能力やポジティブ思考などのポスト近代型能力が重要であることがわかりました。

——こうした「ポスト近代型能力」を強調する言説が登場してきた背景には何があるのでしょうか。

本田 「若者の人間力が落ちている」と言われますが、そんなことはありません。若者の能力水準が下がっているのではなく、若者への要求水準が高まっているのです。高まる要求にあわせて能力を伸ばす者も出ると、下が目立って見えるのではないかというのが私の見方です。

こうした要求が高まっている背景としては、まず産業構造の変化があります。大量生産・大量消費の時代が過ぎ、デザインや技術のわずかな違いをめぐって、消費者の中にむりやりのようにニーズを喚起するような創造性が求められている。組織においても、官僚制的な上意下達だけでは成り立たなくなり、専門性をもつ人たちを結び合わせコーディネートしていくような存在が求められます。一方ではこのような柔軟性や創造性、ネットワーキング力をもつ高水準の労働が求められるようになってきているのと同時に、他方では接客や販売のような、それほど技能水準の高くない対面サービスにおいては、また別種の対人能力——気配りや「人当たりのよさ」のようなものが要請されています。

また文化や消費の面でも、多様化・分化が進む中で、異質な他者の間で自分をやり繰りしていく能力が求められている面もあります。さらに、もうひとつの要素は社会階層です。経済成長や高校・大学進学率上昇によって社会全体が上昇移動できていた、あるいはそういうイメージを抱くことができていた時期が過ぎて、経済成長が鈍化し、大学進学率も五〇%に近づいてくると、これまでの相対的な有利さを維持することが難しくなってきた社会層には、自分たちの子弟にとって有利になるようにゲームのルールを書き換えたいという気持ちが高まらなく、その際に持ち出されてきているのが「ポスト近代型能力」という選抜基準である可能性があります。少なくとも、これら三つの要素が考えられます。

——同じ「人間力」という言葉でも、実は情動を搾取される側と、情動を操作する側という、異なる層に向けて発せられている言葉であるかもしれないですね。ところで、これまでは近代型能力主義社会だったと言われましたが、女性たちは会社に入っても、必ずしも近代型能力を発揮して業績を上げることが歓迎されてはいませんでした。相手の反応を見ながら、自分の情動を使っていくような対人コミュニケーションは、ポスト近代型能力のひとつというより、近代的な能力主義から排除されてきた女性にこれまでも要求されてきたものに見えるのですが？

本田 それは先ほどの区別でいうと、相対的に低位の対人サービス職種において要求される能力ですね。介護労働などでは、気配りや優しさ、配慮といった、従来女性に求められていたような能力がより強調されています。一方で、実践ではなく構想を担う側に求められているのは、人にあわせる能力ではなく、創造性やオリジナリティなど別の種類のポスト近代型能力です。このようにグラデーションがあるなかで、女性が社会に出て行く場面が増えたとしても、このままでは低位の労働に動員されていく可能性が高いと思われま

——評価のしにくいポスト近代型能力が主流になれば、低位の職種では労働の価値を押し下げる方向にはたらくのではありませんか？ 気配り等の「能力」があるからといって派遣労働者の賃金上がる理由にはならないけれど、ないことは契約を切る理由になる。近代型能力が基準であれば、「それはセクハラだ」と聞えたのですが。

本田 おっしゃるとおり、ポスト近代型能力の支配力が強まるハイパー・メリトクラシーの恐ろしいところは、いかなる差別もまかり通るといふことなんです。客観的な基準がないので、評価する側が、能力があるのかないのかを恣意的に決めることができる。非対称的な関係の中で、(能力が)ないと言われた側は抗いようがない。最近企業も、表現力とか創造性を基準に採用試験をすると公言していますが、それで落とされてしまった学生は、全人格を否定されたような気になるし、抗弁もできない。不採用が続くと、どんどん精神的ダメージが蓄積されてしまいます。

——ポスト近代型能力を育成する場としての家庭教育、とりわけ母親たちへの要求が非常に高まっていると指摘されています。

本田 教育に関する母親への要求や圧力は、社会規範としては前からあったと思いますが、今まで政策課題としてはそれほど強調されていなかったのが、より重視されるようになってきました。

話がそれるかもしれませんが、育児支援では、いつも乳幼児期の母親への支援が言われます。しかし、もっとも母親の役割が重要になるのは、もっと年齢が上がってからだと思っ

うんです。三歳児神話ばかりが目立ってきましたが、小学校高学年頃から思春期にかけての、難しい年齢で受験にも直面している子どもにきちんと対応するためには、母親は子どもを放ってそうそうフルタイムでは働いていられないというような、中学生神話、高校生神話のようなものが、現実の母親の意識や行動に強く影響していると思います。それに加えて今は、教育に関する母親たちの責任を政治が強調し始めて、それを家庭の外で補うどころか、家庭でもっとやれという圧力が強まっているように見えます。

——一方で、教育や養育など家庭の機能が市場によって代替される動きもすすんでいます。それは、母親への圧迫を減らすのでしょうか？

本田 それが微妙なところですね。「家族の教育戦略と母親の就労——進学塾通塾時間を中心に」(『女性の就業と親子関係』勁草書房、二〇〇四年)で平尾桂子さんが分析されているのですが、進学塾を利用しているのは結局、専業主婦なんです。階層に関係なく、フルタイムで働いている親はむしろ塾を利用しにくい。なぜかという点、家庭外の教育産業を十分に利用するためには、コーディネーターとしての母親の役割が非常に大きいというので

すね。どの塾にするかを調べて選んだり、送り迎えや弁当を作ってもたせたり、家で塾の宿題をきちんと見てやったり、スポーツや音楽などを習わせるにしても、こまごまと道具や着る物を準備したり試合や発表会のために動員されたりするわけです。

ですから家庭外教育の市場が発達したからといって、それが全部母親の役割を代替してくれるわけではなくて、母親はいっそうマネージャーかつコーディネーターとしての役割を要請されることになっていきます。

——その「スーパーマザー」という要求に対して、女性たちがいかに応えようとするか、応え得るかは、階層によって相当に異なってくるのですね。

本田 従来の近代型能力は、いっしょけんめい勉強するとか、一夜漬けで何とか対処するとか、個人の努力でどうにかなる部分があったんですが、新しいポスト近代型能力は、一朝一夕に身につけられるものではない。子どもの頃から育ってきた環境がものを言うところがありますが、それにはどうしても格差があります。ポスト近代型能力を子どもに身につけさせるためには、お金だけでなく、いろんな資源が必要です。親が身につけた社会経験、知識やノウハウという文化的資源、あるいは子どもとの関係の良さ。そうしたものを投入してスーパーマザーになろうとするのは、子どもに十分かつじょうずに手をかけてゆけるといふ自信と時間的余裕がある親たちだと思います。

先ほど、同じ「人間力」でも社会の上層と下層で質が違ふという話が出ましたが、私が最近行っている聞き取り調査から透けて見えてくるのは、高階層のお母さん方は、職場上層に求められる種類の「人間力」——「はっきりものが言える力」や意思の強さ、ネットワーク力など——を子どもに形成しようとしていることです。それに対して、そこまで諸資源を潤沢にもっているわけではないお母さん方は、やはり子どもに対しては勉強だけでなく他の面もできるだけ良くしてやるうという気持ちはもっているのですが、それを表現する際の言葉遣いがやや違うのです。たとえば「人様に迷惑をかける」とか、逆に「人に流されない」、あるいは「手に職をつける」「少なくとも自分で食べていく」など、子どもの将来像としてイメージしているものがどうも違う。結局それは、職場における上層から下層までグラデーションをもっている「人間力」の質の差異に対応しているのだと思います。

社会上層のお母さん方が、子どもに対して、職場の管理職にとって重要な能力を身につけさせようとするのは、明らかに彼女たちの経験が反映しています。子どもができるまで大企業で総合職で働いていた女性は、できる上司や有能な男性を身近に見ていて、男の子だったらああいう人に、というイメージをもって対しているわけです。そういう環境を経験したことのないお母さんたちは、むしろ地域社会の中で近隣とうまくやってくために必要な能力を子どもに身につけさせようとする。

また、きわめて高階層のお母さん方は、夫の海外赴任に同行したり、自身が留学やフライトアテンダントなどの経験があるので、海外にしばしば出かけるのが当たり前。すると視野もグローバルで、子どもにもホテルのボーイに対して英語を使わせてみたり、海外の基準で通用する礼儀正しさであるまわせようとする。そういうふうにして彼らが生きてきた世界が子どもに投射されていく。それで格差が出ないわけがありません。

ただし、そういう広い経験をもち、できるだけ子どもに様々なものを注ぎ込もうという高階層のお母さんの努力は、うまく行けばいいんですが、詰め込みすぎると、燃え尽きたりストレスからキレル子どもも出てくるようなんですね。子どもの気持ちを考えないわけではないけれど、「こうあるべきだ」という母親の価値基準がはっきりしているので、受験にしても塾にしても、やらせたほうがいいと思っただことはやらせる。母親が上からある

程度強く押し付けることになるので、すると子どももそれへの反作用として強く返すようになるんですね。「うちの子は言い方がきつくて」とか「周りの子どもと軋轢が多くて」という言葉が複数のお母さんから出てくる。

それに対してふつうの家庭のお母さんは、塾にしても、子どもが行きたいと言ったら行かせます、というふうに子どもの意思をできるだけ尊重しようとする。子どもには、自分の意思をもてる人間になってほしいという思いもっています。ところが、そういうお母さんの姿勢そのものが、他者の意思を尊重していて、受動的なんですね。そうすると興味深いことに、子どもは、そういうお母さんの受け身の基本的な基本姿勢の方をむしろ身につけてしまっ、自分の意見を言わなくなりがちです。逆説的なことに、母親からの期待と反して自己主張しない子になる。周りにあわせる子になるんです。ちょっと事例を単純に一般化しすぎかもしれませんが、そういう例が複数みられます。

「できん子はできんままでいい」という三浦朱門の言葉を思い出す話ですね。上に行けない子どもは目標もそこそこにして、人当たりがよければいい、と。文科省のねらい通り？

本田 もちろん文科省はそういうことは表立って言いません。でも結果的には、家庭ごとに違う子育て、違う目標にしたがって、ヒエラルキーのなかでの位置づけが違う人間を生み出していく。「家庭教育は大事」というスローガンは、高い階層に対してだけではなく、朝ごはんを食べないで学校に来る子がいるとか、そういう家庭教育の「崩れ」が声高に指摘されることによって正当化されています。ただ、実際にそういう呼びかけに応えるのは、一定以上の資源と意識をもっている階層でしょう。応えるだけの余裕や意識がもともとなない家庭は、呼びかけには最初から耳を貸さない。それによって、政府が意図した結果とは違ふかたちで格差が広がるのではと懸念しています。

平成28年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

行政政策学類 編入学及び学士入学

本田由紀『もじれる社会——戦後日本型循環モデルを超えて』(2014年、筑摩書房)からの一部を素材にして、読解力、論理的な文章構成力、表現力などを問う。

問1 「近代型能力」との相違をふまえながら、「ポスト近代型能力」およびその背景を要約させ、読解力、論理的な文章構成力、表現力を問う。

問2 要約に必要な読解力と論理的な文章構成力、表現力に加え、社会階層に関する基礎的理解度を問う。

問3 本田氏の見解が有する論理や趣旨に対する的確な理解をもとに、現代社会における諸問題およびその知識・理解とも結びつけながら、自己の意見を論理的な文章構成力、表現力によって明確に説明できているかを問う。